



場 所 浦添市勢理客4 - 14 - 1
構 造 鉄筋コンクリート造、一部プレストレストコンクリート造
地下1階、地上3階建て
延床面積 14,729m²



浦添市勢理客に建設を進めていた「国立劇場おきなわ」が完成しました。国立の劇場としては、「国立劇場」「国立演芸場」「国立能楽堂」「国立文楽劇場」「新国立劇場」について、全国で六番目の施設となります。平成十二年十一月の着工以来、鋭意工事が進められ、本年七月末に完成し、去る八月三十一日には、多くの来賓を迎え竣工式が執り行われました。来年一月十八日には柿落しの落成式典が予定されており、一月二十三日から八週間に亘って、開場記念公演が催されます。

国立劇場おきなわ完成

はじめに

琉球王国には、かつて国王の代替わりごとに中国から「冊封使」と呼ばれる使者が渡来し、「冊封（国王に任命するという詔勅を与えること）」の式典が行われていました。琉球王府は、冊封使をもてなす芸能公演のため、「踊奉行」を設け数多くの音楽、舞踊や演劇を仕立てました。これらの芸能は総称して「御冠船踊」と言われ、十八世紀に時の踊奉行、玉城朝薫によつて、その基礎が固められ、大成したものです。特に「組踊」は、沖縄の芸能や、故事を基礎にして、本土の能、狂言、歌舞伎等の影響を受けて創作されたもので、一七一九年に首里城御庭の特設舞台で初めて上演されました。

本土復帰の年、昭和四十七年に組踊は国の重要無形文化財に指定されましたが、沖縄には、伝統芸能を公演する施設がなかったため、専用の劇場の建設が、沖縄県及び地元関係者から、長く要望されてきました。

折から、平成八年に沖縄振興策

のプロジェクトの一つとして劇場の設立が位置づけられたことから、文化庁と沖縄開発庁（当時）で共同して、国立組踊劇場（仮称）の設置を進めることになったものです。文化庁は、劇場の在り方について検討を進め、沖縄開発庁は、設計費、工事費を計上し、これを受けた沖縄総合事務局で、設計及び工事発注を行ったものです。

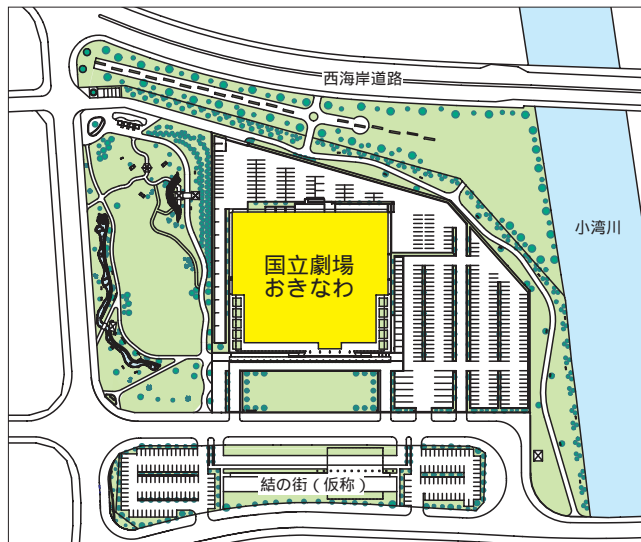
計画概要

国立劇場おきなわは、主舞台、上手袖舞台、下手袖舞台を持ち、回り舞台、前舞台、花道等の床機構を設備した大劇場及び小規模の

公演、研修等に使用される小劇場を持つものです。さらに、多数の稽古室、研修室等を配置し、伝統芸能のあらゆる可能性に対応できるよう設計され、沖縄伝統芸能の殿堂となるものとして構想されています。

ここでは、組踊、琉球舞踊、琉球音楽、沖縄芝居等の沖縄伝統芸能、沖縄の伝統を踏まえた創作、本土の伝統芸能、アジア・太平洋地域を中心とした海外の民俗芸能等の多彩な公演行事が行われるだけでなく、伝承者の養成、研修も行われ、また、沖縄伝統芸能に関する資料を収集し、保存、活用することも考えられています。

配置図



施設配置と 周辺整備計画

劇場は、西海岸道路と小湾川の交差する敷地の中央に、建物の正面を東向きとし、まわりを広場、野外芸能空間、駐車場で囲むほぼ正方形の形で配置しています。劇場建設に合わせて浦添市では、劇場へのアクセス道路の拡幅や歩道の整備及び南側・西側の隣接地に、組踊公園（仮称）を整

備しています。また、東側の隣接地には、結の街（仮称）整備事業が、本年九月に着工し、平成十六年度中の竣工を目指しています。劇場周辺が、一体的に整備されることにより、国立劇場おきなわを中心とした文化ゾーンが形成されることとなります。

設計趣旨

設計において大きな課題、テーマとなったのが、
・「沖縄らしさ」や「伝統的」ということを如何に表現するか。
・組踊をはじめとする沖縄の伝統芸能のための劇場の在り方、舞台・客席形式は何か。という二点です。

沖縄らしさや伝統の表現
琉球王朝時代の民家の特徴に、長大な庇が、深い影をつくる「雨端（あまはじ）」と呼ばれる軒下空間と、格子状や、網代状に竹を組み込んだ「チニブ」と呼ばれる外壁があります。これらは、陽射しを和らげたり、風を通したりと、激しい気候や環境をただ遮断するのではなく、気候風土と共生する中から生まれてきたものです。この伝統的建築様式を意匠的なモチーフとし、造形的なプレキャストコンクリートの外壁で表現し、

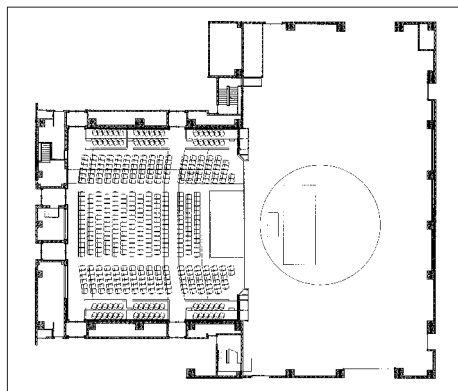


外壁モックアップ

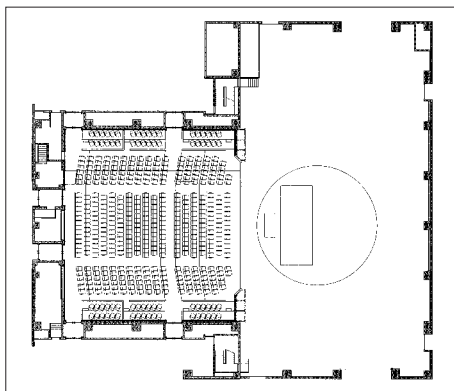


チニブ

堅牢で彫りの深い、かつ呼吸するような建築を目指しました。
この外壁は、一・九mモジュールで網代状の斜格子のユニットが連続しています。今回は、これを現場打ちプレキャストコンクリートで製作しました。この外壁は、ひねりを伴った三次元の複雑な形状をしており、形状の検討、製作、建て方の問題点等を把握するため、「モックアップ」を製作しました。これにより精度の高いユニットの製作が可能となり、施工性も向上し、設計の意図を十分反映した出来映えとする事が出来ました。



大劇場平面図(オープンステージの場合) 1/800



大劇場平面図(プロセニウムステージの場合) 1/800

沖縄伝統芸能の舞台形式
琉球王朝時代に組踊は、首里城の「御庭(うな)」で三間四方の舞台を仮設して、演じられていた。現在では、舞台に所作台を敷き演じられています。元来、沖縄の伝統芸能は屋外で演じられており、歌舞伎や能、オペラのように範とするものがありませんでした。そこで、地元の演者、演奏家、

演出家、舞台技術者、研究者等の意見をうかがうため、ヒアリングワークショップを開催し、さらに仮設舞台を制作しての検証を通して、劇場、舞台形式をまとめました。この結果、大劇場は、オープンステージとプロセニウムステージの両機能を備えた他に例を見ない可変式舞台となりました。

大劇場

大劇場は二層となっており、両側にバルコニー席を設け、舞台を三方から取り囲むように配席しています。組踊公演時のオープンステージで五百七十八席、通常のプロセニウムステージ時で六百三十二席となっており、花道設置時は、五百七十九席です。劇場は、芝居小屋の伝統的な形状である箱形で、木格子を使った内装には、伝統的な意匠の美しさ、深みと柔らかさがあります。

また、緞帳は、格子状に凹凸を付けるという工夫がされており、格子の向こうに水平線や風景のようなものが見える抽象的なものとなっていますが、ライティングによりいろいろな表情を醸し出すデザインとなっています。紅型幕も設置しており、人間国宝玉那覇有公氏にデザインをお願いしたものです。



大劇場

小劇場

小劇場は、客席数二百五十五席で、比較的小規模の公演を想定しています。大劇場のような回り舞

また、エントランスホールの正面一階に資料展示室、二階にはレファレンスルームが設けられており、沖縄のほか国内外の伝統芸能の資料の閲覧が出来るよう配慮されています。

共通ロビー・ホワイエ

台や迫りといったものは設けていませんが、ごんまりとした劇場は、客席と舞台の一体感と親密な雰囲気を作り出すことができ、独演会や発表会には最適です。小劇場に設置されている緞帳は、「ニライカナイ」をイメージしてデザインしたもので、夢と希望を感じさせるものとなっています。

共通ロビーは、観客の動線の核となる場所です。ここを基点に大劇場、小劇場等にアクセスします。左側が大劇場とホワイエ、右側がチケットカウンターとカフェ、右奥に小劇場が配置されています。

劇場には、用途に応じた大きさの楽屋が備えられています。また、三階には、養成研修室や大稽古室をはじめとする施設を数多く設け、技芸の正統な継承、伝承者の養成を組織的、一元的に事業として行っていくことが可能となっています。

楽屋・稽古室等



小劇場



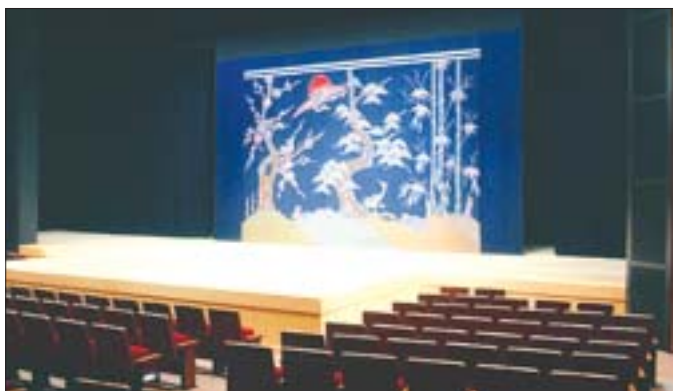
共通ロビー

国立劇場おきなわは他の国立劇場と同様に日本芸術文化振興会の施設です。劇場の管理運営は、沖縄の伝統芸能、文化の独自性をいかすため、地元関係者により設立された「(財)国立劇場おきなわ運営財団」が行います。今後、「組踊」を中心とする沖縄伝統芸能の保存振興を図るとともに、沖縄の地理的、歴史的な特性をいかし、伝統文化を通じたアジア・太平洋地域の交流の拠点となることを目的としていくことになります。

おわりに



中楽屋



大劇場紅型幕



大稽古室



養成研修室